
ファーストキス

Sebolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファーストキス

【Nコード】

N6434V

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

それは真里菜のキスから始まった

ファーストキス

「あきらさん・・・いい？」

そう言うですでに家に入ってきている真里菜、彼女は幼馴染で親友の雄太の妹で小さい時からよく遊んだ仲で俺にとっても妹みたいな存在だった。

彼女も今や俺と同じ高校に通う女子高生、しかも学校では可愛いと評判で俺にまで紹介しとて言うてくる奴が出る程だった。そんな彼女が俺の目の前でDVD片手に玄関で靴を脱いでいた。その様子を見ていた俺は思わず真里菜に聞いてしまった。

「いいけど、お前んちDVDないのか？」

「あるんだけど、アニキに見られるのがはしくって」

「アニキだと恥ずかしくって俺だといいのか」

俺の質問にウンと頷く真里菜、どうも俺も彼女の行動に弱いのか

「しゃあないな・・・」

「やったあ！！」

そう言うってDVDを持って俺の部屋に走って行く真里菜、しばらくして部屋に行くと真里菜はすでにDVDを見ていた。これがいつもの光景といえは、それまでだが、この日は俺の一言が真里菜を怒らせてしまった。

俺の横でDVDを見ている真里菜・・・ちらっと見るとかなりかわいくなっている。真里菜ってこんなだったっけ？そう思っている
と俺の視線に気付いたのか真里菜が話しかけてきた。

「あきらさん。どうしたの？」

「あっ・・・いや・・・」

俺は思わず目をそらし、どもってしまった。

「あっ？ひょっとしてHなこと考えてるの？」

どき！！な・・・何を言ってるんだ真里菜・・・俺はそんなつもりはまったくないのだがその真里菜の口から”Hな”という言葉が出てくるとは？

はっきりに言って俺は焦っていた。

「そ・・・そんな・・・ことない・・・だいたい・・・真里菜は俺の妹みたいな感じだし・・・」

そう話した時、「そう・・・」とつぶやいた真里菜は俯いて黙り込んでしまった。そして、そのままDVDをじーっと見ていた。

ふと真里菜のことが気になり、DVDを見ている横顔をチラッと見た。その目は涙が出そうだった。俺は思わずポツリとつぶやいた。

「じめん・・・いいすぎた」

その言葉を聞いた真里菜は、再び俯き手で涙をぬぐっていた。

「あきらさん・・・わたし・・・妹なの？」

「あ・・・いや・・・それは・・・」

「じゃあ・・・」

「さつき、真里菜がHなんていうから・・・動揺してだな」

そつだお前があんなことを言わなければ、おれも変なこと言わなくてすんだんだ！！そう思いつつも真里菜の顔が見れない俺は、DV Dの方へ視線を向けた。

その時だった。

真里菜が俺の肩に手を置いて話しかけてきた。

「あきらさんっ！..!」

声ができる方を向いた俺は驚いた。

真里菜の顔のドアップがそこにあった。しばらく固まる俺・・・

し・・・しかも・・・真里菜の奴、おれの肩に両手をチョンと置いて・

・

しかも上目使いでこっちを見ているし・・・

か・・・かわいい・・・

「は・・・」

思わずテレビの方を向いてしまった。俺は、画面を見て驚いた。

ちょうどキスシーンが・・・

「あきらさん〜てば〜」

軽くをおれの肩をゆるする真里菜・・・その声に、ゆっくりと首を動か
し真里菜を見た

しばらく見ていると・・・真里菜は目を閉じた。

おれ・・・どうしたらいいんだ・・・

真里菜の顔が近づいてきた。

俺も思わず目をつぶった。そして、唇にやわらかい感触が・・・

しばらく続いた。

唇が離れたら息を呑む俺・・・こ・・・声のかけ方がわからない・・・

真里菜の少し頬を赤らめ両手で自分の口を覆った。

なんてしぐさするんだ。

真里菜は目をうるませ・・・くるっと振り向いた。

そして立ち上がりこうつぶやいた。

「わたしのファーストキスだから・・・」

そっぴい残して、真里菜は部屋を出て行った。

部屋に取り残された俺は、しばらく放心状態だった。

バカ

あれから数日が過ぎ、いつもの日常が始まっていた。俺の気持ちをのぞいて

しかし、あの日から真里菜も俺のところ遊びに来ていない。

そんなある日、登校途中の真里菜を見つけた。

気がつくと俺は真里菜を見つめていた。

ま・・真里菜だ・・・頼むから気付かないでくれ・・そう思っていると真里菜は俺のことに気付いていつものように近づいき挨拶をしてきた。

「あきらさん〜!!おはよう!!」

「あ・・おはよう・・」

ふと真里菜の視線が俺と合った。思わず目をそらす俺・・

その行動に怒ったのか真里菜は俺の足を思いつきり踏んだ。

「痛って!!」

そう叫んでうすぐまる俺をおいて真里菜は友達の方へ走っていった。

しばらくして、誰かが肩を叩いた。

「何やってんだ？あきら」

見上げると真里菜の兄、陽太が立っていた。

「陽太か・・・」

立ち上がった俺に陽太がにやけた顔をして

「なにかあった？」

「いや・・・別に・・・」

授業になって身が入らない俺、常に真里菜のことが頭から離れない。
どうしたんだ・・・そう思っているとメールが入ってきた。

「あきら・・・顔に出すぎだぞ！！」

「えっ？」

驚いた俺は思わず声を上げた。周りが一斉に俺の方を注目した。

そして、損状況を見て俺は、

「あ・・・いや・・・」

「中田！！誰が授業中にメール見ていって言った！！」

センコーが怒り出した。

授業が終ってこつてり1時間説教を食らった俺、校門まで来るとそこには真里菜が立っていた。立ち止まりしばらく真里菜を見つめる俺、その時だった。一人の男子が真里菜に駆け寄っていった。

しばらく話す二人、声をかけるタイミングを失った俺は、二人の横をスルーパスしようとした。

俺に気付いた真里菜が食い下がる男子に

「ごめん、先約があるから」

そう言つて、俺の腕をつかんだ。その光景を見た男子は肩を落とし俺たちをおいて去って行った。

その男子を見て驚いた。今、振った奴つて学校で女子から結構人気のある奴だった。

「真里菜？」

「何？あきらさん」

そう言つても俺の手を離さない真里菜・・・しばらく俯いて俺が黙り込むと真里菜も気付いたのか

驚いて手を離した。

「帰ろうか？」

「うん。」

しばらく、会話がない俺たち・・・ただ・・・黙って歩いていた。

何を考えているのだろうかそう思っているとふと真里菜の言葉を思い出した。先約があるから・・・

「真里菜？」

「なに？」

「先約って？」

しばらく俺の顔を見る真里菜・・・思い出したかのように

「あ・・・先約ね・・・それが？」

「いや・・・何かなと思って？」

「あきらさんと二人でDVD見せてもらおうと思って。」

「えっ？」

「なに？」

「そ・・・そんなこと初めて聞いたぞ。」

「いつものことじゃない・・・」

「まあ・・・そうだけど」

まずい・・・このまじゃか話すことがなくなる・・・

「じゃあ・・・いいわよね」

「まあ・・・とじろで」

「とじろで?」

俺の一言に立ち止まった真里菜は俺の方を見た。

「さっきの奴って?」

「あ・・・あの・・・」

「結構、女子に人気ある奴だろう。」

「まあ・・・」

「付き合ってるんか?」

この一言に真里菜は、俯いてしばらく黙り込んだ。

「本気で・・・そう思ってるの?」

「あ・・・いや・・・」

ま・・・まずい・・・変なこと思わず言ってしまった。その後悔した俺だがすでに遅かった。

バチーン!!

俺の左の頬に大きな音と悲しい痛みが襲ってきた。

左手で頬を押さえ、じっと俺の方を見る真里菜を見ると目には涙が

「バカ!!」

そう叫んで真里菜は走り去っていった。

そこにいたのは馬鹿な俺だった。

しばらく立ちつくす俺がそこにいた。

そして、家に帰った俺は、何も考えられることも出来ず、ただ一人部屋でボーとしていた。

そこにメールが入ってきた。

「バカ」

真里菜からだった。

俺はただベットで頭を抱えていた。

それから数日間、俺は真里菜と会うことはなかったというかどんな顔をして会えばいいのか

そう考えると見かけると思わず身を隠していた。

なぜ？

おれが

隠れる必要があるんだ？

そこには真里菜の顔を素直に見れない俺がいた。

しかし、誰にも言えない。そんなことが頭を離れないまま、廊下を歩いていると

ばつたりと真里菜に会った。あゝ！！誰か助けてくれ！！どうしたらいいんだ！！

俺の心の叫びをよそに何とか出せた言葉が

「真里菜・・・おはよう」

そんな俺の必死な言葉に真里菜は簡単に答えた。

「おはよー！！」

そっぴい残し、すつと俺の横を抜けていった。

.....

.....

．．．．．

なんだ．．．

一体なんだ？．．．

この寂しいというか虚しいというか．．．

この孤独感．．．

お．．．おれは．．．ま．．．真里菜のこと．．．

そう思っても手遅れかそう考えながらこの日も下校の時間が来た。

ふと目の前を見るとまた真里菜がいた．．．

思わず身を隠す俺。

そして、ある男子が真里菜に近づくこの間告白していた奴だ・・・

奴は真里菜にやけに馴れ馴れしく話しかけていた。

その光景を見ていたら、俺はあることを望んでいた。

真里菜・・・断ってくれ・・・

俺のぞみが届いたのかこの日も真里菜はその男子の誘いを断った。

そこにはほっと胸をなでおろす俺がいた。

帰り道

真里菜が去った後、俺は家に向かってとぼとぼと歩いていた。

バチーン!!

俺の後頭部を衝撃が走った。

しばらく頭を抱えてうずくまる俺

い・・・いて・・・

「何やってるんだ？」

ふと見上げるとそこには陽太がいた。

「おまえな〜」

「まあまあ〜」

両手を前に出し俺を制するようににこやかに答える陽太に対し

俺は、この怒りの矛先を全て陽太に向けた。

「大体だな〜!!」

俺がそう言いかけた時だった。俺の後ろから声がした。

「お兄ちゃん」

その声には俺はビクツとなった。真里菜だ。

俺がゆっくり振り向く、そこには、驚いた表情の真里菜がいた。

「あきら……さん」

そう言っただ俺をじっと見つめる真里菜……

俺は、早く逃げたくて仕方がなかった。

「どうした真里菜。戻ってきて」

そう質問したのは、陽太だった。

「あ……うん……学校に忘れ物して……」

「そうか……じゃあ……遅いし、待ってどうか？」

「やめてよ、恥ずかしいから」

「そうか？あきらはどうする？」

そんな振り方をするな……！！俺は心の中で叫んでいた。

「あ……おれ？」

真里菜の方を見ると彼女は俺から目をそらした。

どうしたらいいんだ？

「お・・・おれ・・・いつものところによるから・・・」

「そうか・・・」

陽太は、俺の肩を組んで耳元でつぶやいた。

「お前・・・しつかりしろよ・・・」

えっ？そう驚いていると

「じゃあな・・・あきら・・・真里菜はやく帰ってこいよ」

こっぴどい残り陽太は去っていった。

取り残された俺と真里菜・・・

真里菜はじつと俺の方を見ていた。

「「あ・・・」」

俺の声と同時に真里菜の声が聞こえた。その声を聞いて再び俺はどろりとしたらいいのかわからなくなった。

そして、真里菜も黙り込んでしまった。

焦った俺は、何とかしないとあることを思い出した。

そっだ忘れ物

「真里菜・・・忘れ物って？」

俺の言葉を聞いて、思い出したかのように慌てた真里菜

「あ・・・そっだった。」

そっ言っって慌てて学校へむけて走り出していった。

俺は真里菜の後姿を見るのがやっとだった。

いくじなし

しばらく、俺は真里菜が消えて行った方を見ていた。

どうしたらいいんだ・・・俺、そう迷っているうちに真里菜が戻ってきた。

俺を見つけた真里菜は、立ち止まって嬉しそうに俺の方を見ていた。

「待ってくれたの？」

真里菜の一言目に無言になる俺・・・なんて答えたらいいんだ。

「あ・・・ああ・・・」

「そう・・・」

真里菜は俺の言葉に不満そうな顔を見せていた。

「帰ろうか」

「うん」

やがて俺達は黙って歩き出した。

何とか・・・しないと・・・焦る俺・・・

「そう言えば・・・何・・・忘れたの？」

ビクツとなる真里菜・・・

「あ・・・宿題よ・・・」

「宿題ってひょっとして、」

「そう・・・ムロ先の」

「ああ・・・ムロ先ねえ〜あいつ容赦ねえからなあ〜」

歩きながら俺の方を見つめる真里菜・・・

「先生の言ってたことって本当なの？」

「ああ・・・」

「本当なの？」

「俺がそのひどい目にあつた一人だ」

「えっ〜うそじゃないんだ・・・」

「マジでやってないとまずいぞ」

「どっしりようじ」

そっぴいと真里菜は立ち止まった。同じように俺も足を止めた。

「どっしりした・・・」

「だって……できないよ……あんなむずかしい宿題……」

困った表情をする真里菜……

「陽太のノート写したらいいんだよ。」

「そんなことできないよ……」

弱ったなあ、俺はそう思いながら……仕方がない……

「ちよつと遠回りだけど俺の家まで来るか？」

「えっ？」

「この間も来ただろう？」

俺は後悔した。それは目の前の真里菜が顔を真っ赤にして俯いていたらだった。

「あ……」

言葉を失った俺……この間って……キスしたんだそう思うと俺もだんだん顔が熱くなってきた。そして、しばらく、二人の間に沈黙が続いた。

ど……どうしたら……焦る俺……そうだ……

「ま……真里菜、ここで待ってる。」

そっぴい残し俺は、家に向かって走っていった。ダッシュで家につ

いた俺は、例のノートを探した。そして、それを手にして、真里菜が待っているところまで走っていった。

俺を見つけた真里菜

「あきらさん・・・」

く・・・苦しい・・・俺はゼエゼエ言いながら真里菜にノートを渡した。

「これ・・・」

そのノートをジーツと見ている真里菜・・・

「問題はほとんど一緒だから写せばいいよ・・・」

俺の言葉を聞いて、視線を上げた真里菜・・・俺の方と見つめていた。

息を切らせながら真里菜を見た俺・・・真里菜の口が少し動いた。

「あきらさん・・・ありがとう・・・」

そう言って、真里菜はジーツと俺のノートを見つめていた。

そして、俺の方を見つめた。俺もただ真里菜の方を見つめ返した。

やがて、真里菜は目を閉じた。その光景を見て、俺はただ戸惑った。

どうしたらいいんだ！！そう心で叫びつつ思わず

「ま・・・真里菜・・・じゃあ・・・これで・・・」

そう言って、俺は家に向かった。

しばらくして、真里菜からメールが入ってきた。

いくじなし・・・

数日後

あれから数日がたったある日のことだった俺はある噂を聞いた。それは、真里菜に告白していた男子がほかの女子を振ったということだった。しかも、最後の台詞が

「おれ・・・真里菜一筋だから・・・」

こんな言葉が真里菜にも変な噂が飛び火した。そして、放課後、校門で真里菜を待つ例の男子の姿があった。そんなことも知らずに帰ろうとする俺の前を真里菜が歩いていった。

「真里菜さん。」

そう言って近づく例の男子

「おれ、本気です。」

その時だった真里菜は俺に気付いて俺の方を見た、そして、彼の手をとった。

その瞬間俺は、固まってしまった。何も考えらず、ただ、その光景に怒りすら覚えた。

真里菜・・・行くな・・・

そう心で願っても、二人は去って行った。

気がつく俺は真里菜の家に立っていた。しばらくして、真里菜は帰ってきた。俺を見つけた真里菜・・・俺を無視して家に入ろうとした。俺は思わず真里菜の腕をつかんだ。その手を見て真里菜は、怪訝な顔をして

「何よ」

「待て」

「なぜ？」

真里菜への反論が出来ない俺だったがつかんだ手を離さなかった。

「離してよ!!」

そう叫んで真里菜は俺の手を振り切った。そして、家に入ろうとした。

「待ってくれ!!」

「だから・・・」

真里菜は戻ってきてあきれた表情で俺を見た。

言わなきゃ・・・俺は、必死に声を絞った。

「お・・・おれ・・・」

だめだ・・・声が出ない・・・

「お・・・俺・・・」

いざとなるとこ・・・声がでない・・・焦る俺・・・

「・・・」

緊張している俺を真里菜はじっと見つめていた。

> i29501 | 3798 <

「ま・・・まり・・・なの」

俺をジーンと見て一言一言に頷く真里菜

「真里菜のこと・・・す・・・」

その瞬間だった。

「何してるんだ。お前ら」

後ろから声がした。

ドキー！！

俺と真里菜はその言葉で慌てて離れた。振り向くとそこには陽太がいた。陽太はニヤニヤしながら、俺と真里菜を交互に見た。そして、

「お前ら・・・なにしてるんだ」

「な・・・なにつて・・・」

黙る俺と真里菜

「怪しいな・・・」

「あ・・・」

声もなく俯く真里菜、俺も何も言えなかった。

「いちやつくのもいいが、家の前ではやめろ!!」

「あのなあ〜!!」

「お兄ちゃん」

そして、陽太は、俺達をおいて家に入ろうとした。

「じゃあ・・・おっと・・・付き合っのいいが、ちゃんと避妊しろよ
!!」

「な・・・何を言うんだ!!」

「お兄ちゃんのバカ!!」

「ジョーダンだよ。ジョーダン・・・じゃあな!!」

そう言っつて、陽太は家に入って行った。

取り残された俺達には気まずい空気が流れ、横に並んでお互いをチラチラ見ていた。なんてこと言っつんだ陽太のやつ・・・そう考えて

いると真里菜の口からボソツと寂しい響きが伝わってきた。

「家に戻るから……」

「ああ……」

「今日は……」

その後の声が聞き取れなかった。俺はとぼとぼと歩いてその場を去った。

家についた俺……

メールを打った

「ごめん……」

やがて真里菜からメールが帰ってきた。

「バカ……」

俺は、今日はいえなくてごめんと思っていたのに……

真里菜の返事は……一体……

忘れていたこと・・・

翌日、学校では、真里菜と例の彼との噂で持ちきりとなっていた。

相手の彼自身ももう真里菜は自分の恋人とてつきり勘違いしていたようだった。

そんなこととは露知らず俺はいつものように学校に出ていた。

「あきら、知ってるか？」

「だれだ？と思いきや普段は俺に話しかけてこないお調子者の伸一だった。」

「何を」

「陽太の妹のこと」

「陽太の妹だ？あいつ俺が陽太と仲がいいから聞いてんのか？」

「陽太の妹！？それがどうした？」

「昨日の告白！・・・！」

「その言葉に俺はドキッとした・・・俺が真里菜と話していたのを見たのか？こいつら？」

「それって？」

「お前もいたじゃん？校門で」

「ああ・・・そんなことか・・・」

門でのことね。そう思うと俺は胸をなでおろ、しばらく、伸一から目をそらし、自分の席に向かった。

無視していく俺を呆然と見送る伸一

「おい・・・あきら・・・待て・・・」

俺は自分の席に座り、窓の方を見た。結局昨日もちゃんと見えなかった。

自分が情けない・・・そう思い机に伏せた。

「あきら!!--!」

そんな時だった。陽太に呼び出されたのは、

「あきら・・・ちよっと・・・」

「なんだよ陽太」

「お前・・・真里菜のことどう思ってるんだ？」

そう言って陽太は俺の胸をドンと叩いた。

「どっつて・・・？」

陽太の奴一体何のつもりだ？

「はっきりしろよ。このままじゃ……真里菜はやつのところへ行
つてしまうぞ。」

「えっ？」

「好きなんだろう？」

陽太の一言に俺は驚き、慌てふためいて。

「ま……真里菜は……だな……い……妹……み……みた……」

俺が言う前に陽太は、背中をバンと叩いた。

「いい加減にしろ……！」

そして、俺の襟首をつかんで

「真里菜を泣かせたら……ただじゃ……おかねえから……」

そついうと襟首をつかんでいた手を振り払って、教室に戻って
いた。

放課後、俺が校門まで行くと目の前で真里菜の例の男が話を
していた。

「なあ〜真里菜、今日どこ行く」

「行かない」

「何つれないの？ひよっとして、恥ずかしいの？」

「何言ってるのよ。」

「どうして？」

そいつも半分怒り気味で真里菜を見ていた。

そこへ通りかかった俺を真里菜は見つけて、俺のほうを見つめた。俺に助けを呼んでいるかのように

そいつも真里菜の視線に気付き俺のほうを見た。

どうしよう・・・そう迷っていると

「あ・・・あきらさん」

そう言っつて真里菜は俺に近づいてきた。

その男は俺と真里菜の間に入り、俺に睨み

「貴様、誰だ？」

「誰って？」

「真里菜とどんな関係なんだ？」

この質問に困った俺は、ふと真里菜の方を見た、真里菜は俺の方を見ているだけだった。

答えに困っていると後ろから声がした。

「何やってんだ、真里菜」

俺達が振り返ると陽太がそこに立っていた。

その男は真里菜を呼び捨てにされたのがよっぽど気に食わなかったのか

俺達をおいて、陽太の前にまで行って睨みながらこういった。

「真里菜って？お前こそ一体誰なんだ！！」

その様子を見た陽太は、そいつを指差して、ちらつと俺達の方を見た。

「一体誰なんだって聞いてんだろ！！」

その時だった。

「お兄ちゃん！！帰ろう！！」

そう言って真里菜は、陽太を呼んだ。

「えっ！？おにいちゃん！？」

その男は目が点になっていた。

「おう、真里菜、あきら、帰ろうか」

そして、陽太は、その男の肩を叩いて、

「そういうことだ・・・じゃあな!!」

俺達3人は、家路についた。

「もうっ・・・最低!!」

「真里菜が悪いんだろ!!」

そう突っ込みをいれる陽太に

「悪くないもん!!」

「まあ～まあ～」

俺が二人をなだめようとすると

バン!!

陽太が俺の後頭部を靴で叩いた。

「痛って、何すんだよ」

「お前が一番悪い!!　あっ・・・俺、用事があるから」

そついい残し俺達を置いてその場から去っていった。

やっとの思い

陽太が去って、しばらくの間・・・

俺達の間には会話はなかった。

ただ黙って同じ方向に向いて歩いていった。

しばらくして

「なぜ？」

真里菜がつぶやいた。

俺が真里菜の見るとうつぶむいて、少し悲しそうに見えた。

俺は思わず

「ごめん・・・」

俺の言葉に真里菜は立ち止まった。

俺も同じように歩みを止めると真里菜は俺のほづを振り向いた。

その時だった。

パチーン！！

俺の頬を真里菜の平手が襲ってきた。

「っ!!」

俺は叩かれた頬に手をやり振り返ると目の前で真里菜が俯いていた。

「バカ!!」

「バカって」

両手で俺の胸をたたき泣き始めた真里菜は、

「だってバカじゃない!!」

「……」

「だって……だって」

そついいながら両目をこする真里菜に話しかけた。

「ごめん」

何度も謝る俺に真里菜は首を振る

「そんな言葉ほしくない……」

「……」

俺の頭の中は真っ白だった。謝っているのになぜ？

一体どうしたらいいんだ。

俺はただ言葉もなく真里菜を見つめた。

すると真里菜は、俺の胸をドンと両手で突いて走りだした。

俺も慌てて真里菜を追いかけた。このままじゃいけない・・・その
想いが俺を動かした。

「待て!!」

俺がそう叫んでも真里菜は止まってくれない。

俺は、真里菜をしばらく追いかけた。

そして、ようやく追いついた俺は、真里菜の手を掴んだ。

「待ててば!!」

俯いたままようやく立ち止まった真里菜・・・

俺は真里菜の肩に手をやり俺のほうを向かせた。

しかし、真里菜は俯いたままで俺のほうを見ようとしない。

いざ言おうとすると・・・こ・・・言葉が出ない・・・

しばらく黙る俺達・・・その沈黙を破ったのは真里菜だった。

「な・・・なんなのよ!!」

「……………」

「黙ってないで何とか言っつてよー!!」

そう言っつて真里菜は俯いたまま俺の胸をドンと叩いた。

「……………」

しばらくして……言葉が出ない俺に……

「わたしのこと……嫌いな……?」

絞り出すような声でつぶやいた真里菜は、俺の胸を叩くのをやめてしまった。

「す……好きだ……」

言っつてしまった俺が驚いた……あれだけ必死になっつて言おうとし
て出なかつた一言がポロツと出た。

「えっ?」

顔を上げ涙目のまま俺を見つめる真里菜

顔がこれでもかというくらい熱くなり、心臓の音が俺の耳まで聞こ
えた。

そして

再び声が出なくなつた俺……

「……………」

しばらく見つめ合っていると真里菜が口を開いた。

「今……なんって?」

「……………」

固まって何も言えない俺

「なんて言ったの?」

真里菜の言葉に誘導されるかのように俺は再びあの言葉がでた。

「す……すき……だ……ま……真里菜の……こと……が」

真里菜は目を潤ませ俺の胸に抱きついた。

俺自身もう何がなんだかよくわからない状態だった。

気がつくと俺は両手で真里菜を包んでいた……

一体どのくらい時間がたったのだろうか……

胸の中の真里菜がつぶやいた

「あきらさん……………」

その声に俺は両手を緩め真里菜のほうを見た。

真里菜もじつと俺を見つめ両手を首に回してそっと目を閉じた。

徐々に近づく真里菜の顔・・・

そのまま俺は震えを押さえ、必死に真里菜とキスをした。

しばらくして、真里菜の唇の感触が離れていった。

この日から俺達の日常が変わった。

数日後・・・

「ごめんなさい・・・好きな人がいるの」

例の男子を振った真里菜・・・

しばらくこの話題で学校は盛り上がっていた。

そんなことは気にも留めない様子の真里菜はいつものように俺の家に来ていた。

「あきらさん、早く！」

そう言って、俺の許可もないまま部屋に向かう真里菜

「また、DVDか」

「ひどい」

真里菜が少しむくれた時、キスをした。

「もうっ・・・もうちょっと雰囲気を出してよ」

「しゅめん」

そう言って俺はテレビの前に座っていると

DVDをセットした真里菜が俺の横にそっと座ると自然と肩にもたれかかってきた。

「真里菜・・・」

「なに？」

「今度の日曜日・・・どっか行くっか」

「しゅん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6434v/>

ファーストキス

2011年9月29日21時37分発行